

67 仲順流り（八）

子どもを三人産んだがね、産んだ子どもの心はわからないという。今日のよい日にね、三人集めて、そして、この心を調べるといふんですな。そしたら、長男に言つたらね、

「ぼくはもう年のためで、物を食べないから、君の家内の乳をぼくにやれ」と言つたら、「年はもう、そんな年になつておるからもうだめだ。断わる」と。長男は。

それから、次男はね、

「そんなに年になつたので、もうだめだ。朦朧もろろなつておる。お前は死ぬならもう死ぬ」と言つて。またこれも断わるんです。次男。

それから三男はね、

「ナシグワーというのは、また産めると。ところが、親というのは二度とは得られないから、子どもは捨てて乳を上げます」といふんです。乳をね。そしたら、

「もし君が子どもを捨てるならば、東の森に三本松が生えておるから、その松の下に三尺穴を掘つて、そこに埋めなさい」と。本当はこれ、三尺穴掘れというのはこのお爺さん、ここに埋めてあるんですよ。そして、もしも親に孝行する者にはこれを与えようという意味でやつておるもんですからね。

この三男は、三本小松の下に三尺穴を掘つて捨てろといったもんだから、今度は子どもをおんぶしてね、あそこの森に、そこに三本の松があるんですよ。したら、三本の松があるから、

「ここまで来た。もうとうとう君とぼくとはお別れだなあ」と言つて、子どもに対して泣くわけさ。

そして、子ども降ろして、今度、一鍬下ろしたら一尺、二鍬やったら二尺、今度、三鍬打ったら三尺だからね。今度三鍬打ったら、とうとう子ども埋めるところですがね、子ども埋めようとしたら、黄金が花を咲いてね。黄金の花も拝まれて、なんじゃ（銀）の花も拝まれて、子どもの命も救われて、親子連れて家に帰るつていふんです。

字名城 伊敷亀順

類話

字摩文仁 伊集盛亀
字伊原 上原孝助